『東京大学言語学論集』**38** (2017.9) 353-362

古代日本語における非情の受身の意味

張莉
jasumin@163.com

キーワード: 非情の受身　意味　物理的影響　心理的影響　状態　結果

要旨

本稿は、古代日本語[1]の非情物[2]主語受身（いわゆる非情の受身）の意味を検討することを目的とする。非情の受身を分析する際のキーワードとその内実に注目し、先行研究で扱われた用例を整理した上で、古くから存在する非情の受身を有情の受身に準ずるものと本来の非情の受身という二種類に分けて考察を行う。有情の受身に準ずるものは人が感じる心理的な影響を表し、実質上有情の受身と見る。本来の非情の受身は非情物主語が動作主の行為によって物理的な影響を受けるという意味を表す。

1.　はじめに

伝統的な国語研究では、三矢 (1908)、山田 (1908)、松下 (1930)、橋本 (1931) などに帰されることの多い「非情の受身非固有説」が受け入れられてきた[3]。

「非情の受身非固有説」で扱われる受身には二種類ある[4]。一つは主語が非情物で、行為者がニヨッテで表示される受身である。非情物に及ぶ動作・作用を表し、外国語の翻訳などにより日本語に持ち込まれたものである。こうした受身を非固有とすることに異論はないと思われる。もう一つは、主語が非情物で、行為者がニで表示される受身である。古語においても存在するが、稀であると思われることや意味的に自動詞的で状態の意味を表すことが多いことから、「純正なる国語の受身」[5]（利害を表す受身）ではないとされるものである[6]。本稿は後者、すなわち古くから存在するものを対象にその意味を検討する。また、本稿では後者のみを「非情の受身」と見る。

2.　先行研究

---

[1] 管見の限り、言語研究では古語に対する明確な定義が見られない。非情の受身に関する先行研究で古代語とされるものをみる限り (川村 2012 など)、おそらく和漢混淆文や欧文翻訳文などが日本語に広まる前のものを古語とするのであろう。『広辞苑』によると、和漢混交文は「平安後期に起こり、中世以降広まった」。よって、本稿は中世以前の、上代、中古の資料に記録されている日本語を古語と見る。

[2] 非情物は、英語の inanimate に相当するものを指す。

[3] 「非情の受身非固有説」は、三矢、山田、松下、橋本が提唱したものではなく、後の宮地 (1968)、小杉 (1979)、清水 (1980)、中島 (1988) がまとめたものである。

[4] 一つ目の非固有を二つ目の非固有と誤解するものも古くから見られる (岡田 1900)。

[5] 「純正なる国語の受身」は、三矢 (1908:173) の「純正なる国語の語脈にあらざる」、中島 (1988:2) の「純正なる国語の受身ではない」などに由来する。

[6] 非情物主語行為者無表示のものは意味によって振り分けられる。

古語における非情の受身の量と意味に関しては、以下のような研究がある。

量的に稀であることをめぐって、宮地 (1968) は古典に見られる非情の受身の用例を 130 件ほどあげて非情の受身は、非固有ではないと主張している。これを受け継ぎ、三浦 (1973)、原田 (1974) はそれぞれ平安末期の資料 (『大鏡』及び『今昔物語』など)、『枕草子』を観察し、非情の受身の比率が 12%、26%であることを実証している。清水 (1980) は中古から近代までの資料を調べ、中古の平均使用率が 16%であると報告している。さらに、奥津 (1983,1988) によると、『枕草子』、『徒然草』、『万葉集』に占める非情の受身の割合はそれぞれ 27%、38.8%、10.9%であり、中島 (1988) は『万葉集』における非情の受身は 10.8%であると指摘している。これら一連の研究から、非情の受身は決して稀ではないと言わざるをえない。[7]

意味に関しては、諸説ある。三浦 (1973) は和文では、状態性の表現をする場合が多く、動作・行動の表現が少ないが、和漢混淆文では、状態性表現よりも動作・作用の表現が多く見られると述べている。小杉 (1979) は中古の文学作品の用例をあげ、その意味・用法の分析に踏み込み、非情の受身は動作ではなく、結果としての状態を表すとしている。清水 (1980) は文献の性格に注目した上で、非情の受身は客観的な記述に多く用いられると指摘している。奥津 (1983,1988) は文体の違いにも触れながら、視点という原理から非情の受身が古くから使われる原因を説明している。金水 (1991) は、古語にも非情の受身があることを認めながら、多くの場合「叙景文」であると主張している。川村 (2012) は、その種の表現は古くから存在することを認め、それらを三種類に分けて検討し、その内の「擬人化タイプ」と「潜在的受影者タイプ」を事実上の有情の受身としている。さらに、残りの一つを意味（状況描写）と構文形式の特徴（文末述語動詞が「(ラ)レタリ」など）を根拠に、受身から切り離し、「発生状況描写」タイプと命名し、受身とは別種のラル形述語文として位置付けている[8]。

まとめると、小杉 (1979)、金水 (1991)、川村 (2012) は非情の受身は行為の結果状態を表すことに偏るという認識において共通しているが、小杉と金水が非固有説を批判するのに対し、川村は自身の受身に関する定義により、こうした意味を表す非情の受身は受身用法ではないと主張している。一方、三浦 (1973)、清水 (1980)、奥津 (1983,1988) はいずれも文献の種類や文体の違いという非情の受身が使われる環境を考慮に入れて、その意味・用法を観察し、特に奥津は受身文を主語と補語の有生性、無生性、受身文の型とそれぞれの出現率を提示することによって、非情の受身が非固有ではないことを実証した点が注目に値する。

---

[7] 清水 (1980)、奥津 (1983,1988)、中島 (1988) が指摘しているように、有情の受身と非情の受身の割合が文体に大きく依存する。叙情的かつ主観的な人間的関心の強い韻文などでは、有情の受身が多用される一方、叙事的かつ客観的な物や事にも関心のある随筆や散文などでは、非情の受身が用いられる割合は比較的に高くなる。

[8] 川村 (2012:167) では、受身文を以下のように定義している。受身用法：ラル形述語の用法のうち、主語者が、自分の意志とは関係なく、事態（他者の行為や変化）から何らかの影響を被ったと感じること（〈被影響〉）を表すもの。受身をこのように定義した結果、非情物主語の受身文のうち「発生状況描写」タイプは「受身用法」からはじき出されることになる。なお、従来非情物主語の受身文と呼ばれていたものには、擬人化タイプ、「潜在的受影者」タイプ、「発生状況描写」タイプという三つのタイプがあることを主張している (川村 2012:150)。

古くから存在し、出現率が低いとは決して言えず、構文形式上動詞が「(ラ) ユ、(ラ) ル」の形で表され、自発・可能・尊敬のいずれでもない[9]非情の受身を固有と見るか、非固有と見るか、未だ意見が分かれている。古くから少なからず存在することについて意見は一致しており、議論の争点となるのは、その意味を「受身」と考えるのが適切か否かである。「(ラ) レタリ」の表す「状態」の意味をどう解釈すべきかも、再び検討する余地があると思われる。

3. 用例の整理と考察

先行研究で扱われた非情の受身の用例を意味を基準に分類して考察する。分類に関して、奥津 (1983)、中島 (1988) は主語、補語 (ニ格名詞句) の有生、無生に基づいている。一方、小杉 (1979)、金水 (1991)、川村 (2012) は文全体の意味を基準としている。本稿は、文全体の意味をもとに、川村の三分類を見直し、「有情の受身に準ずるもの」と「本来の非情の受身」との二つに大別した[10]。用例は先行研究で扱われたものであり、原則として文末述語用法の用例を挙げている。各用例の後に、出典とその用例を扱った先行研究を示す。

3.1. 有情の受身に準ずるもの——擬人法の表現

(1a) 白珠は人に知らえず (人尓不所知) 知らずともよし知らずとも我し知れらば知らずともよし[11]
(万葉 1018) 中島(1988:9)

(1b) 秋の野の露に置かるゝ女郎花はらふ人無み濡れつゝやふる (後選 275) 金水(1991:9)

(1c) かくれ沼の底の下草みがくれて知られぬ恋はくるしかりけり (大和 138) 小杉(1979:474)

(1a) は本来非情物である主語の指示対象 (以下主語と呼ぶ) 「白珠」が「自分自身」の喩えとして用いられ、有情の受身 (有情者を主語とする受身) と見なされる。(1b) の主語「女郎花」は非情物であるが、女性の喩えとして使われ、女性が涙ながらに日々を過ごしていることを言う。また、(1c) は「かくれ沼の底の下草」の状況が恋心を相手に知ってもらえない読み手の状況と重ね合わされている。川村 (2012:61) は、(1c) の場合、擬人法とは言えないまでも、特に和歌において叙景表現がしばしば人事と重ね合わされていることから、広く擬人法の表現に収めて了解すると述べている。

山田 (1908)、小杉 (1979)、清水 (1980)、奥津 (1988)、中島 (1988)、金水 (1991)、川村 (2012)な

---

[9] 『万葉集』の場合、自発か受身か判断が難しいケースが多い (中島 1988、清水 1980)。古語は主語の格表示がノ、ガ、φなどで、構文形式が明確ではないものが多いのも解釈のゆれの原因であろう。

[10] 本稿の言う「有情の受身に準ずるもの」は川村の擬人化タイプに、「本来の非情の受身」は川村の「潜在的受影者」タイプと「発生状況描写」タイプに対応する。

[11] 下線は筆者がつけたもので、実線が主語、点線が補語、波線が動詞である。現代語訳:(1a)白玉は、人に知られぬ、知らなくてもよい、知らなくても、わたしさえ知っていたら、知らなくてもよい。(「自分自身」を「白玉」に喩えているのであれば、擬人法の表現で、「自分の価値」を喩えているのであれば潜在的受影者を想定しうる表現とも解釈できる。本稿では、擬人法と見る。) (1b) 秋の野にあって、露が置いている女郎花は、その露を払う人がいないので、濡れたままで日を過ごしているのだろうか。(1c) 隠れ沼の底に生えている草が、水に隠れて見えないように、人に知られぬ片思いは苦しいものと、いまさらのように思い知らされました。現代語訳の出典は、『新編日本古典文学全集』で、以下断りのない限り同様。(1b) は『新日本古典文学大系(『後撰和歌集』)』による。

どは非情の受身の擬人法的用法を（純正な）非情の受身と見ないが、本稿でもこの立場をとる。

3.2.　本来の非情の受身

3.2.1.　潜在的受影者[12]が想定できる表現

(2a) かの明石の舟、この響きにおされて、過ぎぬる事も聞ゆれば、「知らざりけるよ」とあはれに思す。[13]　(源氏・澪標) 川村(2012:153)

(2b) なお、才をもととしてこそ、大和魂の世に用ゐらるる方も強うはべらめ。

(源氏・少女) 金水(1991:7)

(2c) 苦しく心もとなければ、ただ、日の経ぬる数を、今日幾日、二十日、三十日とかぞふれば、指もそこなはれぬべし。　(土佐・1月20日)　川村(2012:153)

川村 (2012:154) によると、(2a) は、主語「舟」の持ち主「かの明石」が修飾語として明示され、実質的に影響を受けるのは、明石上らである。(2b) は「大和魂」がノ格で表示され、形式上主語に立っているが、「世（朝廷）がある人の大和魂を用いる」ことで、文外にある「大和魂の持ち主」が影響を被る、という意味が読み取れる。(2c) は、数えるのに指が痛む意味を表し、主語の持ち主の明示も、主語のノ格表示もなく、形式上の主語以外に影響を受ける者が想定できるものである。さらに、川村 (2012:154) は (2c) 類のものは主語に格助詞がないため、「持ち主の受身」との判別がつかないことが多いことと、潜在的受影者が想定できるものの多くがこの類のものであることを指摘した[14]。

潜在的受影者が想定できる表現は、主語以外に人格的な影響を受ける有情者が読み取れるので、非情の受身から除くというのが、小杉 (1979)、川村 (2012) の主張である。

なお、益岡 (1982,1987) と益岡 (1991,2000) では、この類の非情の受身に対する認識が異なる。具体的には、「この町は日本軍に破壊された」の適格性について、益岡 (1982,1987) は「町」が物理的に受影しているとし、主語が非情名詞の受身文の適格性を、ある出来事から何らかの物理的影響を受けることで説明しているが、益岡 (1991,2000) においては、「町」に潜在している有情の被影響者が存在すること、すなわち、潜在的受影者が想定できることが文を適格にすると指摘し、物理的

---

[12] 益岡 (1982,1987) は、統語的特徴から、受身文を「昇格受動文」と「降格受動文」に分け、さらに「昇格受動文」を意味的特徴から「受影受動文」と「属性叙述受動文」に分けている。なお、益岡 (1991:111) は、「潜在的受影者」に関して、「受影受動文の表面には現れないけれども、その受動文が叙述している事象から何らかの影響を受ける存在のことである。顕在的な受影者は持たないものの、これらの事象から影響を受ける潜在的な受影者が想定されるのである」と定義している。

[13] 現代語訳:(2a) あの明石の船が、このにぎやかさに気圧されて、参詣もせず立ち去ったことをも惟光が申し上げると、まったく知らぬことだったな、と君はしみじみ不憫なお気持ちになられる。(2b) やはり、学問を基礎にしてこそ、政治家としての心の働きが世間に認められるところもしっかりしたものでございましょう。(2c) 苦しく、不安なので、ただ、経た日数を、今日で何日、二十日だ、三十日だと数えると、指も痛んでしまうようだ。(2b) は『全訳源氏物語』による。

[14] これに関して、小杉 (1979:477) も「先なる車は、尻ばやにこされて、人々わびにたり（落窪物語）」などの例を挙げ、人の乗っている車や、衣装が受身に主語になっている場合、「人の我が物として運用している車」や「人が着用している装束」で「人」の存在が感じ取られ、これらの用例の中には、「人ガ非情物ヲ…サレル」と見ることが可能なものもあると指摘している。なお、身体の一部が主語になる場合、尊敬と見られる用例もある。

影響による説明を撤回している[15]。ただし、益岡の一連の研究では、適格性の説明に変化はあるが、この類のものを非情の受身と見ている。

潜在的受影者を想定することで適格性を説明するのは、山田 (1908:380) の「非情物が文主にして事実上の主の作用が文主に働掛くることを直接にあらはす如き受身の文は國語には存在せず」という指摘に由来すると思われる。詳しくいうならば、非情物が主語の場合、物理的な影響を受けるという一回的な動作・行為の意味を表す受身は日本語には本来存在しないもので、そこに有情者の存在を加え、有情者が感じる影響を表すものにしてはじめて、本来の日本語として適格な文になるということであろう。しかしながら、三浦 (1973) は、和漢混淆文では、動作・作用の表現が多く見られると指摘している。小杉 (1979) も、『徒然草』になると、「なりひさごといふものを人の得させたりければ、或時木の枝にかけたりけるが風に吹かれて鳴りけるを、かしがましとて捨てつ。〈18 段〉」や「鳥羽の作道は鳥羽殿たてられて後の名にはあらず、昔よりの名なり。〈132 段〉」などの「たり」を伴わない動作・作用としての用法が現れてくると述べている[16]。したがって、物理的な影響を受けるという「非情物が文主にして事実上の主の作用が文主に働掛くることを直接にあらはす如き受身」は、鎌倉時代には存在していたと言えよう。

筆者は、潜在的受影者が想定できる文の成立要因は、非情物が動作主の行為により、物理的な影響を受けると見なされることであると思う[17]。非情物が影響を受けたからこそ、その非情物と密接に関係している有情者が潜在的受影者たりうるのであろう。よって、この類のものを本来の非情の受身の一種とする。

一言付け加えると、本稿でいう影響は、Bolinger (1975)、柴谷 (2000) などで指摘されたように、主語が動作主の行為を受けることによって生じるものである[18]。動作主が対象に働きかけるということは、対象が何らかの影響を受けることにほかならない。事象の参与者や行為のしかたによって、影響のあり方は異なる。対象の位置や状態の変化など、物理的な影響もあれば、もっぱら心理的な影響もあり、さらに物理的・心理的影響の両方を含意する場合もある。影響のあり方と有情の受身・非情の受身との関係は、心理的な影響は、有情の受身のみに限られる一方、物理的な影響は、有情と非情の受身の両方にありうるというものである。

3.2.2. いわゆる状況描写の表現

(3a) 御腹もすこしふくらかになりにたるに、かの恥ぢたまふしるしの帯のひき結はれたるほどな

---

[15] 益岡は非情の受身に関して、物理的な受影性を表すものもあることを認めている。益岡 (2000) によると、非情物が主体となる受影受動文のもう一つのタイプは、「砂浜の上に引き上げられた漁船が、月光に照らされて……」のような主体もその相手も非情物のものであり、この種の非情物が非情物に影響を与える場合、物理的な受影性を認める必要があるとのことである。

[16] 小杉 (1979:488) は「たり」が多く現れるのは、中古の仮名文学作品であるとして、これらの「たり」、「り」のつかない用法は、本来の用法を忘れたものとして批判している。

[17] 潜在的受影者を想定するかどうか、また、想定する場合その内実をどう規定するかは論者によって異なる。

[18] Bolinger (1975) は英語受動文の成立条件を論じ、「affectedness」という概念を提唱している。柴谷 (2000:130) は、態の現象は主語と動詞の表す行為との意味関係を対象としていると指摘している。

どいとあわれに、[19]　(源氏・宿木) 宮地(1968:286)

(3b) 楼はただ桜の花の中に包まれたり。　(宇津保・楼の上・下) 宮地(1968:291)

(3c) 夕暮れ、暁にかは竹の風に吹かれたる、目さまして聞きたる。　(枕草子 115) 宮地(1968:286)

(3a) は、主語「しるしの帯」が何者かによって服に「ひき結われている」状態を表す。(3b) が表すのは楼が桜に包まれている様子である。また、金水 (1991:4) が指摘したように、「いと忍びたれど、数珠の脇息に引きならさるる音ほの聞え。(源氏・若紫)」[20]のような、その状態が持続しない用例もある[21]。(3c) は竹が風に吹かれている状況の描写で、「吹く」が自動詞であるのが特徴的である[22]。

川村 (2012:63) は「他者の動作を受けたモノの身の上に起きている結果状態を描写している」ものを「発生状況描写」タイプと命名し、文末述語動詞の形が「(ラ) レタリ」に限られることと、有情者が感じる被影響感を表さないことから、受身から排除している。非情物が主語に立つ以上、被影響感を表さないのはいうまでもないが (擬人化は除く)、問題なのは非情の受身は「結果状態」という意味に限られているか否かである。

非情の受身の意味を「結果状態」と見るのは、述語動詞の「(ラ) ル」が常に「タリ」と共に現れることが大きく貢献していると思われるため、まず非情の受身に現れる「タリ」[23]を見てみよう。

神永 (2016) は「タリ」の意味を考察し、「タリ」が下接する中古の非情の受身は、タリ文における変化の結果用法の一種であり、意味は人または風、雨などの自然の力による動作・作用の対象である非情物の位置や形状などの変化の結果であると指摘している。その上、こうした意味に関して自動詞と比較し、「対象変化動詞+ル・ラル」は自他の対応における自動詞と同じく、主体の変化の結果を表すと述べている[24]。例えば、「また、畳紙の手習ひなどしたる、御几帳のもとに落ちたり(源氏・賢木)」[25]は、「落とす」という他動詞で示される行為の結果、畳紙に「落つ」という自動詞で示された変化が起きていることを述べている[26]。

---

[19] 現代語訳(3a) 女君はお腹も少しふっくらとなっているので、あの恥ずかしく思っていらっしゃる懐妊のしるしの帯が結ばれている風情などまことにいとおしく。(3c) 夕方や明け方に河竹が風に吹かれているのを、目をさまして聞いているの。

[20] 現代語訳：数珠の脇息に触れて音を立てるのがかすかに聞こえ。

[21] 「あこぎ、格子あげらるる音をききて、いかならむとおどろき惑ひて起くれば、(落窪物語)」に見られる「音」は「たり」を下接しなくても、それ自体が動作性のない存在であるので、「たり」「り」で状態性にする必要がない。小杉 (1979)

[22] 金水 (1991) は動詞の自他対応の観点から、現れる動詞が対応する自動詞のない他動詞が多いため、他動詞に対応する自動詞の「穴埋め」であるとしている。柴谷 (2000:152) は、自動詞が使われるのは、他動詞がベースになるのであると主張している。古いものを見ると、作用が直接的に受身文の主語に及んでいるものと見られる場合や、主語が心理的な影響を受けている状況を表したものが主で、主語が物理的・心理的作用の直接的な対象となっていて、他動詞ベースの受身に近いものと解釈できるとしている。鷲尾 (2008) は、「風に吹かれる」という受身表現と古くからある《風が～を吹く》という他動表現との関係について考察している。

[23] 中古における「タリ」の意味：「タリ」には、主体の自発的変化、動作的変化、因果的変化の結果と対象変化の結果を表す用法があるが、「テアリ」には、主体の因果的変化の結果を表す用法がない。「タリ」が衰退し、用法が「テアル」、「テイル」に継承された。非情の受身には「タリ」のみが下接する (神永 2016)。また、「タリ」が下接するのは、非情の受身の場合だけではなく、有情の受身にも、状態性の表現になり得るものがある (岡田 2013)。

[24] 因果的変化とは主体の他動的行為 (変化を起こす原因) から自動的状態 (変化の結果) までという過程で見られるもので、変化前後に因果関係が認められる (神永 2016:56)。

[25] 現代語訳：また一方に、懐紙に歌など書きちらしたものが、御几帳のもとに落ちていた。

[26] 変化は人によるものが自然の力によるものよりも多く見られる (神永 2016、原田 1974)。

そこで、「結果」という用語を検討する。「結果」には、二通りの使われ方がある[27]。一つは「動作・作用の結果」すなわち、「動作・作用の結果としての変化」である。「動作・作用」、「変化」、「結果」を「落とす・落ちる」でいうと、「落とす」は主語による目的語への動作・作用とその結果としての目的語の変化、すなわち、原因事象と結果事象からなる複合的な事象を表すが、「落ちる」は結果としての目的語の変化という結果事象のみを表す。また「落とされる」と「落ちる」は、ともに結果事象を表すが、前者は原因事象を意味に含むのが特徴的である。この意味での結果を「結果a」とする[28]。もう一つは、変化後の状態の持続の意味で、アスペクト局面の一種である。「結果状態」に使われる「結果」は、おそらくアスペクト局面のもので、これを「結果b」とする。

いわゆる状況描写の受身でよく言われる「結果状態」には、以上で見た二つの意味の結果が含まれ、動作の結果aで生じた変化が完了した結果b状態のことである。これが「動詞＋（ラ）ル」に、「タリ」や「リ」などの状態性の助動詞が加わって生じた文全体の意味である。そのうち、「動詞＋（ラ）ル」は対象の位置や形状の変化という結果aを、「タリ」や「リ」などの助動詞は変化が完了した状態の持続という結果bを表している。したがって、非情の受身自体が表すのは、結果aであり、動作・作用の結果としての変化であり、主語が動作主の行為によって受ける物理的な影響であろう。

非情の受身は非情物主語が動作主の行為によって物理的な影響を受けるという意味を表すという結論が出たところで、非情の受身を非固有とする観点を振り返ってみよう。

松下 (1930:160) は「被動では動作に二つの方面が有る。第一方面は動作そのものとしての方面で第二方面は我に與へる利害影響としての方面である。だからその利害影響はやはり動作である。この意味に於て利害を被るのはやはり動作を被るの一種である」と指摘している（ここでいう動作そのものと利害影響は、筆者の用語での物理的影響と心理的影響に当たる）。となると、受身の主語が有情者または擬人化された非情物の場合は、動作の二つの方面を兼ねて持つ類――直接受身（先生に叱られてしょんぼりしている）と、動作の第二方面しかない持たない類――間接受身（子供に泣かれてよく寝られなかった）がある。一方、非情の受身の場合、動作の第一方面のみを持っている。非情の受身非固有説では、この種の受身は本来の日本語にはなかったということになる。

しかしながら、以上で論じたように、潜在的受影者が想定できる受身も、いわゆる状況描写の受身も、物理的な影響を受けるという意味を表す。そして、こうした物理的な影響を表す非情の受身が古くから少なからず存在することはすでに指摘されている。したがって、本稿は、非情の受身を固有の受身と見る。

---

[27] 宮腰 (2012) は、「結果」を二つに分けて定義する。a.「結果（result）」とは、原因によって引き起こされたコトである。b.「結果（resultative）」とは、単一事象の完結点以降のアスペクト局面である。宮腰の言うresultが本稿の結果aに、resultativeが結果bに対応する。

[28] 西村 (2015) では、動詞「開ける」が主語の指示対象による目的語の指示対象へのはたらきかけとその結果としての目的語の指示対象の変化を意味に含んでいると指摘している。

4.　まとめと今後の課題

「有情の受身に準ずるもの」は、形式上非情の受身であるが、文が表すのは人が心理的な影響を受けるという意味なので、有情の受身と見てよいと思われる。

「本来の非情の受身」は非情物主語が動作主からの行為によって物理的な影響を受けるという意味を持っている。「影響」は動作主の行為の対象が受けるものである。行為の対象が主語になる受身文が成立するには、「影響」の有無が肝心なところである。

「潜在的受影者が想定できる表現」は、当の非情物だけでなく、それに関わる人も影響を受けている。非情物が影響を受けたからこそ、人も影響を受けることがありうるのである。それに対し、「いわゆる状況描写の表現」は、非情物しか影響を受けていないのである。

「いわゆる状況描写の表現」は、動作主からの行為によって物理的な影響を受ける意味の実現の仕方として、一回的な出来事の意味よりも状態性の意味が多く見られるのは、物事を状態の意味でとらえる傾向のある日本語話者の特性と関わっていると考えられるが[29]、言語類型論的な観点からこの指摘を捉え直し、状態の意味が多く見られる理由を考察することを今後の課題にしたい。

また、古語の非情に受身に関して、「仁王会など行はるべしとなむ聞こえはべりし（源氏・明石）」といった行事の実施を表す用例をめぐる議論も意見が分かれている。川村 (2012) は現代人の目から見ると非情の受身と読めると指摘しつつ、伝統的に尊敬の例であると解されていると述べているが、三矢 (1908)、宮地 (1968) は漢文直訳により日本語に取り入れられたものとして、受身として認めている[30]。このような物事の生産、出現を表す用例は非情の受身なのか。さらに、今回踏み込まなかった主語、補語の有生、無生とそれらが明示されるかどうかが非情の受身の意味とどう関わるのか[31]。以上の問いに答えることも今後の課題である。

参考文献

青木伶子 (1980)「受身表現」『国語学大辞典』: 60-61 東京：東京堂出版.

岡田正美 (1900)「対部・補部・客部」『日本文法文章法大要』吉川半七 (北原保雄・吉田東朔編「日本語文法研究書大成」: 20-41 東京：勉誠出版　2001).

岡田誠 (2013)「古代の非情の受身と有情の受身について」『國學院大學大学院文学研究科論集』40: 35-49.

奥津敬一郎 (1983)「何故受身か?——<視点>からのケース・スタディ——」『国語学』132: 65-80.

---

[29] 青木 (1980:61) は「物事を状態としてとらえる傾向のある日本人の特性から考えても、自発から受身が出たとする説は最も妥当性があると思われる」と述べ、受身は自発から出たと論じている。

[30] 神永 (2016) は物の生産、出現を表す動詞を対象変化動詞と見ている。

[31] 補語の有生、無生の状況は、非情の受身全般に補語に有情者も非情物もくる。擬人法の用法は際立っている傾向がない。潜在的受影者が想定できる表現では、補語が有情者の用例が多く、明示されないのが普通である一方、補語が非情物の用例は少なく、明示されるのが多い。いわゆる状況描写の場合は動作主が明示されるのは非人格的存在に限られる (金水 1991)。

奥津敬一郎 (1988)「続・何故受身か？――『万葉集』の場合――」『国文目白』28: 92-105.

神永正史 (2016)「変化の結果を表す「～てあり」の用法について――「～たり」との関係から」『日本語の研究』12(4) : 52-68.

川村大 (2012)『ラル形述語文の研究』東京：くろしお出版.

清水慶子 (1980)「非情の受身の一考察」『成蹊国文』14: 46-52.

金水敏 (1991)「受動文の歴史についての一考察」『国語学』164: 1-14.

金水敏 (1993)「受動文の固有・非固有性について」『近代語研究』第九集：471-508 東京：武蔵野書院 .

小杉商一 (1979)「非情の受身について」『田辺博士古希記念助詞助動詞論叢』: 473–488 東京：桜楓社.

柴谷方良 (2000)「ヴォイス」仁田義雄・益岡隆志編『日本語文法 I 文の骨格』: 119-186 東京：岩波書店.

中島悦子 (1988)「『万葉集』における「非情の受身」」『日本女子大学大学院の会会誌』7: 1-11.

西村義樹 (2015)「使役構文」斎藤純男・田口善久・西村義樹編『明解言語学辞典』: 102 東京：三省堂.

橋本進吉 (1931)「受身可能の助動詞」(講義案・高橋一夫筆記「助動詞の研究」収録『助詞・助動詞の研究』: 266-292 東京：岩波書店 1969).

原田信一 (1974)「中古語受身文についての一考察」『文学・語学』74 (再録 福井直樹編『シンタクスと意味――原田信一言語学論文撰集』: 516-527 東京：大修館書店 2000).

益岡隆志 (1982)「日本語受動文の意味分析」『言語研究』82: 48-64.

益岡隆志 (1987)「受動表現の意味分析」『命題の文法――日本語文法序説』: 161-194 東京：くろしお出版.

益岡隆志 (1991)「受動表現と主観性」仁田義雄編『日本語のヴォイスと他動性』: 105-121 東京：くろしお出版.

益岡隆志 (2000)「叙述の類型から見た受動文」『日本語文法の諸相』: 55-69 東京：くろしお出版.

松下大三郎 (1930)「被動の動助辞」『標準日本口語法』: 150-171 東京：中文館書店.

三浦法子 (1973)「平安末期の受身表現についての考察」『岡大論稿』創刊号：129-143.

宮腰幸一 (2012)「日本語結果表現に関する予備的考察」『論叢現代語・現代文化』9: 1-43.

三矢重松 (1908)「非情の受身」『高等日本文法』: 173-175 東京：明治書院.

宮地幸一 (1968)「非情の受身表現考」『近代語研究』第二集：277-296 東京：武蔵野書院.

山田孝雄 (1908)「受身につきての論」『日本文法論』 : 371-380 東京：宝文館.

鷲尾龍一 (2008)「概念化と統語表示の問題――日本語・モンゴル語・朝鮮語の比較からみる《風に吹かれる》の本質―」生越直樹・木村英樹・鷲尾龍一編著『ヴォイスの対照研究』: 21-64 東京：

くろしお出版.
Bolinger, Dwight (1975) On the Passive in English. *The Frist LACUS Forum 1974* : 57-80.
『広辞苑（第六版）』(2008) 岩波書店.
『新日本古典文学大系』(1990) 岩波書店（『後撰和歌集』）.
『新編日本古典文学全集』(1994～2002) 小学館（『萬葉集』『枕草子』『源氏物語』『大和物語』『土佐日記』『宇津保物語』） http://japanknowledge.com
『全訳源氏物語・上巻』(1971) 角川文庫　http://www.genji-monogatari.net.

The Meaning of Inanimate-Subject Passives in Ancient Japanese

Li Zhang
jasumin@163.com

Keywords: inanimate-subject passive, meaning, affectedness

Abstract

By analyzing some attested examples of inanimate-subject passives in ancient Japanese and critically examining some of the concepts that have played key roles in the analysis of inanimate-subject passives, this paper argues that inanimate-subject passives in ancient Japanese can and should be classified into two semantic types: those equivalent to animate-subject passives and inanimate-subject passives in the strict sense of the term.

Those equivalent to animate-subject passives, which express psychological affectedness experienced by the personified referent of the subject, should be treated as animate-subject passives. Inanimate-subject passives in the strict sense of the term, on the other hand, portray the action performed by an agent as something that happens to (i.e., something that physically affects) the referent of the subject.

（チョウ・リ　上海外国語大学）